

## 7 LD・ADHD等通級指導教室 学校生活支援教員の役割

### 学校生活支援教員とは？

小中学校の通常の学級では、さまざまな個性や学びかたの特性を持った子どもたちが学習・生活しています。なかには、授業中や学校生活のいろいろな場面で、やっていきにくさを感じている子どもたちもいることでしょう。

学校生活支援教員は、その名前の通り、一人一人の子どもたちの学校生活がより充実し、うまくいくための活動をしています。子どもたちのやっていきにくさが何であるかを先生方と一緒に考え、必要な支援を提案したり、実際に子どもたちと関わったりしながら、子どもたちの学校生活がより主体的で楽しいものになるよう取り組んでいます。

そのために、担任の先生や保護者をはじめ、それぞれの子どもに関わる人たちとのコミュニケーションを大切にしながら、目標を共有して支援にあたっています。

三木市では、小学校 2 名、中学校 1 名の学校生活支援教員が市内各小中学校の児童生徒の支援にあたっています。（平成 29 年度現在）

### 学校生活支援教員が担当する通級指導（LD・ADHD等）の実際

#### ・対象となる子ども

小中学校の通常の学級に在籍する児童生徒のなかで、LD、ADHD などの発達上の課題により、学校生活を送るうえで困難を感じている子ども

具体的には・・・

- ・読み書きなどがスムーズにしにくく、ノートをとることが難しい
- ・落ち着いて学習課題に取り組むことが苦手で、持続して課題に取り組むことが難しい
- ・学校の予定や宿題などの把握が難しく、見通しを持って段取りよく取り組むことが苦手で、やるべきことが途中で終わってしまう
- ・道具をうまく使えないため、実技や実習についていきにくい
- ・友だちとの関わりのなかで誤解が生じやすく、トラブルになったり仲間に入りにくかったりする
- ・集団参加や学校行事等に参加する際に緊張感が強く、一人ではうまく集団参加しにくい



## 指導内容

- それぞれの子どもが感じている困難に対する教育的支援（自立活動）
- 各教科学習の基礎となる内容の学習支援（教科学習の補充）
- 担任の先生との必要な支援についての話し合い
- 子どもや保護者との教育相談
- 認定こども園、幼稚園、保育所、小中高校間や関係機関との連携

学校生活を送る上での困難さに周りが気づかず、必要な手だてがないまま学校生活を続けていると、子どもたちにはうまくいかなかった経験ばかりが蓄積していきます。それが、「自分はだめなんだ。クラスのなかで役に立たないんだ。」という自己肯定感の低下につながっていくこともあります。これらの困難さに対して、学校生活支援教員は、必要な支援を提案、提供し、**子どもたちが、生き生きと自信を持って、自分なりのよさを伸ばしながら、クラスメートとともに学校生活を送れるようになることを目標としています。**

## 指導や支援の形態

- **通級指導**・・・児童生徒が学校生活支援教員配置校の通級指導教室に通って定期的に必要な指導や支援を受けます。通級指導教室配置校に在籍している児童生徒が利用する**自校通級**、他校の児童生徒が通級指導教室のある学校に通って指導を受ける**他校通級**があります。
- **巡回指導**・・・児童生徒が在籍する学校に学校生活支援教員が定期的に巡回し、必要な指導や支援を行います。
- **教育相談**・・・学校生活支援教員が、児童生徒と直接関わるだけでなく、保護者や学級担任等と相談しながら、よりよい関わり方や支援の手だてを共に考えます。



## 指導時間数

- それぞれの児童生徒の必要に応じて、**月 1 時間～週 8 時間**と定められています。
- 通常の授業時間帯だけでなく、必要に応じて、放課後や夏休みなどの長期休業中にも指導時間を設定できます。

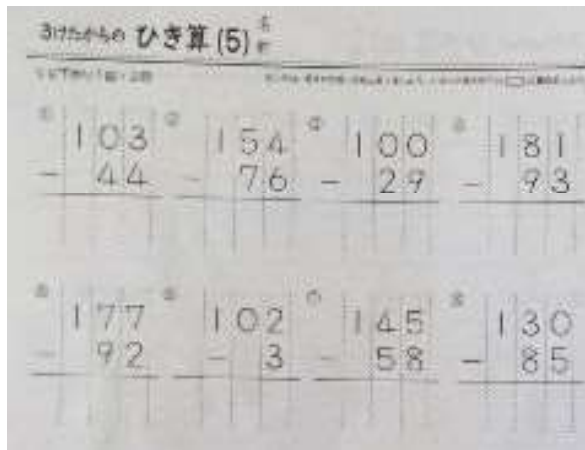
こんなことをしています・・・

小学校編

筆算のプリントをやる気になれないAさん(3年生)

こんなにいっぱいできないよ～

と言って、なかなか問題にとりかかれ  
ないAさん。



一問だけ見えるようにして、他の問題を隠すと少しやる気になり、全部できました。

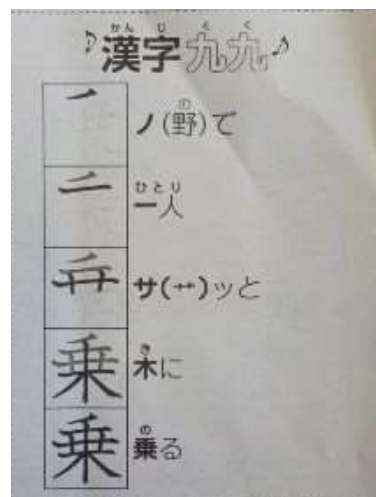


漢字がなかなか覚えられないBさん(4年生)

漢字のミニテスト(10点満点)はいつも1～2点。自信もやる気もなくなっていました。

漢字九九を唱えながら覚えると複雑な漢字も覚えやすくなり、自信ができました。

※ここで示している「漢字九九」とは、特別支援の漢字教材～唱えて覚える漢字九九シート～(発行 学研教育出版)を参考にして作成しています。



### 一つの自分から いろいろな自分へ (Cさん5年生)

クラスで一人一人スピーチ発表する時やみんなの前で話す時、緊張や不安からか声が小さくなり、うまく言えないことが続いた5年生のCさん。クラスで発表したり話したりすることがイヤになっただけでなく、学校生活において自信も失っているようでした。通級の時間にも「ぼくにはいいとこなんてありません。」とネガティブな発言が目立っていました。そんなことないと伝えても暗くしんどい日々が続いていました。そんな時、学校の先生からCさんがスリッパを並べていたのを何度も目にしたことや委員会の仕事を確実にしていることを聞きました。クラスメートが、「そうじを一生懸命していました。」と教えてくれたこともありました。こうしたCさんを見ている先生や友だちからの声を集め、箇条書きに読みやすく残していきました。『キラキラ通信(よいこと情報)』と銘打って、定期的にCさんに見せることで「えっ〇〇先生、見てくれたんだ。」「△△さんは、そんなふうに感じてたんだ。」と嬉しそうにつぶやいたり、「そういえばそんなこともした気がします。」と気づかなかったよいところを感じたり出来ました。毎回、キラキラ通信を見る楽しみと、気づかなかった「いろいろな自分」と出会えることができました。そんな時間を積み重ね、Cさんの表情も良くなってきました。



### 「ここが、わからないんです。」と 感じることを伝えることが生まれた瞬間(Dさん3年生)

先生の説明をしっかりと聞こうとしているけど、「どうしたらいいのかわかりません。」とも言わず、気がついたら何も取り組まないまま授業時間が過ぎていくことが多いDさん。担任の先生もDさんに少しでもわかるように一斉指導ではゆっくり説明をしたり、近くに行って教えたりしていました。それでも、Dさんが自ら取り組むことや、何がわからないのかを自分から言うことはありませんでした。そこで、担任の先生と一緒に相談して、Dさんが少しでも文字を書いたり、数十秒でも考えたりする経験を積むことから始めましょうという目標を設定しました。

担任の先生からのことばの説明(ヒント)と学校生活支援教員が紙に書いた説明(ヒント)のことおりの支援を重ねました。そして、Dさんが取り組もうとした時には、すかさず担任の先生のほめ言葉、合わせて学校生活支援教員からは紙に書いた文字のほめ言葉。時には解答に近いヒントを与えたこともありました。Dさんも少しずつ取り組みはじめ、書く機会も増え、何よりよい表情を何度も見るすることができました。そして、ある巡回の日「ここが、わからないのかな？」という問いかけに、「こっちの方です。」と、はじめて自分から分からないところを伝えることが出来ました。数週間後には、「ここが、わからないんです。」という言葉もDさん自らが発することができました。何よりもうれしい瞬間となりました。



### 「言いたいことがたくさんあります。聞いてください。」(Eさん6年生)

時間割に変更があればイライラしたり、自分の思いどおりにならないことがあればパニックになっていたEさん。話を聞くと、「となりの〇〇くんが、消しゴムを落としたからぼくは書けなかった。」「雨でもプールできるよ。どうせ濡れるんだから。」「どうして算数に変えるんだ!」と自分なりの解釈で話をします。当初、Eさんの解釈について誤りを指摘すると、「間違っていない!悪いのは向こうだ!」と聞く耳を持つことは難しいようでした。通級の時間には、しばらくEさんの話を「うんうん。」や「そっかあ。いやだったね。」とこちらが聞くようにし、複雑な内容に関しては紙に書いて確認することにしました。1時間中ずっと聞くだけになることもありました。しばらくこのような状態が続いたあと、Eさんに少し変化が見られました。Eさんが一方的に話をするのは変わりませんが、「これで今日の話は終わりです。」と終了の言葉を言ったり、話し終わった後、「は～、スツとした。」と思わずつぶやいたりすることがありました。そこで、学校生活支援教員からEさんに、Eさん自身の様子が変わってきていることを伝えました。「前よりイライラ話が減ったね。」や「前は、(怒り顔表情のイラストを見せて)こんな顔で話していたけど、最近はこんな顔(少しにこやかな表情イラスト)が増えたね。」と伝えると、「へえ～そうなんだ。」と不思議そうに受け入れる様子が見られました。

また、ある日には「(担任の)〇〇先生がぼくを職員室に呼ぶということは、絶対に怒ることだから行かなかった。」と話した後で、「〇〇先生、Eさんのことを心配してたんだよ。それに先生から、Eさんががんばっていたこと何回も聞くよ。」と返すと、「本当かなあ～。」といったん自分のなかで考える様子が増えました。それに合わせてパニックも減ってきました。ただ、Eさんの「聞いてください!」という言葉で、相変わらず通級はスタートしています。



## **中学校編**

### 思ったことは何でも主張するので友だちとぶつかってしまいやすいFさん(1年生)

Fさんは、やる気満々で入学してきましたが、中学校には、複数の小学校から入学してくる友だちがいて、思ったことをすぐに口に出してしまうFさんは、まわりの新しいクラスメートにはわかってもらいにくいようでした。掃除の時間、給食の準備や後片付けのときにFさんの一言で周りの生徒たちが怒ってしまったり、Fさんは正しいと思って言っているのに、どうしてけんかになったのかわからなかったりして、ふてくされてしま



うようくなりました。

そこで、担任の先生と学校生活支援教員が相談し、Fさんやクラスの生徒たちへの対応の方法を考えました。Fさんに対しては、どうしてトラブルになってしまったのか、順を追って丁寧に説明し、今度同じようなことがあったらどうすればいいのかFさんと一緒に話し合いました。クラスメートに対しては、そのときのFさんの思いやみんなの気持ちを一緒に考えるなどして、お互いどう接したらいいのかを丁寧に取り組んでいます。

今では、Fさんもクラスメートも、ずいぶんうまく自分の意見を主張しながらも折り合いをつけられるようになり、お互いのよいところを認め合えるようになりました。

### さあ、高校入試。わからないことだらけで緊張感いっぱいのGさん（3年生）

中3といえば、高校入試が控えています。とてもまじめで、何でもきちんと準備していないと次の行動を始めにくいGさんにとって、どんな課題が出るかわからない高校入試の面接や作文は最大のハードルのようです。ホームルームでも入試に向けての作文や面接の練習をしますが、それだけの時間では到底足りません。また、疑問点があってもなかなか自分からは聞きにくいいため、不安ばかりが強くなってきました。そこで、担任の先生は学校生活支援教員に、面接や作文の練習のフォローを依頼しました。

面接や作文の練習を通して、Gさんは、「自分の長所」などの自分について述べることにとりわけ難しさを感じていることがわかりました。「自分のよいところなんてないし、よいところを人に言うなんて無礼だ」と思っていたそうです。そこで、これまでの学校生活のなかの具体的な成果や出来事をあげながら、Gさんなりに力を発揮できたことや得意なことを書き出し、それらをもとに自分のよいところを箇条書きでまとめることから始めました。また、入試の意味を確認しながら自分のよいところを人に伝えることは決して無礼なことではないことについても、具体的な事例を交えながら、本人の納得いくまで話し合いました。

最終的には、Gさんは自分の趣味や他の人にはできないこだわりなどをうまく面接や作文に盛り込むことができ、希望する進路先に進学することができました。

中学校と進路先の学校間では、この間の経緯も含め、進路先での学校生活がうまくスタートできるような情報交換も学校生活支援教員がコーディネートして行いました。

### ちょっと見に来てくれるだけでいいHさん（1年生）

Hさんは、注意集中することが少し苦手で、学習にうまくついていけないかも不安に思っています。その一方で、できる限り自分の力でクラスのなかでがんばりたいという思いも強く、いろいろな支援を受けたい思いと自力でやってみたい思いが交錯しています。

学校生活支援教員は、そんなHさんの学校に週1回巡回しています。毎週Hさんのクラ



スをのぞくと、Hさんは時々そわそわしながらも一生懸命ノートをとったり発表したりしています。休み時間になると必ずHさんのほうから「こんにちは！」とあいさつに来ます。

「何か手伝うことある?」「うーん、勉強はちょっと難しいけど、今は大丈夫です。」「何かあったら、いつでも声をかけてね。夏休みとか部活のない日は、マンツーマンで勉強してもいいよ。」「わかりました!」・・・こんな会話をいつも交わしています。担任の先生は、「今は、みんなの中ではりきってやっていますから、教科担任も含め折々に声をかけてやる気が継続するようにしていこうと思います。」と話していました。学校生活支援教員としても、しばらくは、教室のうしろでさりげなく見守ることと、休み時間の一言の会話をしばらく続けていこうと思っています。



### 通級指導をはじめの前に

学校生活支援教員による通級指導を始めるためには、以下のことが大切です。

- ①通級指導を受けることが適切であることを校内委員会で協議している。
- ②通級指導について、本人や保護者の理解が得られている。
- ③通級指導の目的を本人、保護者、学級担任、学校長で共通理解ができている。

これらを原則として、具体的な学習の仕方や内容は学校生活支援教員と本人、保護者、学級担任等が話し合って決めます。

学校生活支援による通級指導を効果的に活用し、児童生徒にとって学校生活がより主体的で楽しいものになるようにしましょう。

